

冬の旅

Eilika Krishar

アイリカ・クリシャル

Bernhard Wunsch

ベルンハルト・ヴンシュ

2013年1月19日、新春の鎌倉に見知らぬ一人の女性が舞い降りる... “Fremd bin ich ein gezogen...”まるで気付いた人だけが幸せを感じる降り始めたひとひらの新雪のように...

彼女の名前はアイリカ・クリシャル。ドイツが生んだ類まれな才能を持ったソプラノ歌手だ。雪のように白い肌、氷のように澄んだブルーの瞳、冬の陽ざしのようにキラキラと輝くブロンドの髪...。彼女の笑顔は全ての人の心へ春を届ける。しかし今回、彼女は鎌倉へシューベルトの「冬の旅」を届ける。

2011年9月、今まで女性が歌った録音が4本しかなかった「冬の旅」のCDをミュンヘンでリリースし、衝撃的なデビューを果たした。その後すぐにベルリン・フィル・ハーモニー・ホールやミュンヘンの王宮劇場、クヴィルス・テアターのような有名な劇場やホールから出演依頼が相次ぎ、世界的な音楽家達—例えばイェルク・デームス氏やステファン・ラオックス氏、ベルンハルト・ヴンシュ氏—は、アイリカの歌を絶賛している。その様な素晴らしい歌い手になるまでの彼女の一步一步の歩みは決して華々しいものではなかった...。1983年北ドイツ・東フリースラント地方で生まれ、5歳よりピアノを始め、16歳でアメリカ・サン・ディエゴに一人で渡り声楽を始める。その後、ドイツ・デトモルト国立音楽大学にて学ぶが、志半ばにて歌の道をあきらめる。人生は時には一歩も前に進めなくなるほどの吹雪が吹き荒れることもあるのだ...。しかし、彼女の心はいつも歌を求めている。その後ミュンヘンの哲学専門大学に通い、哲学と元来持っている詩と文筆の頭角を現しつつあった2005年、ベルカント唱法の秘密を解き明かし、オペラ歌手の育成と声の治療で世界中を駆けめぐっていた小林春仁教授とミュンヘンで運命的に出会い、歌の道へ再帰したのだ。彼女の止まることの知らない爆発的な成長ぶりに、小林教授自身驚きを隠せず、今もそれは変わらない。

また、彼女は修業時代、日本全国150回以上ものコンサートを行い、彼女の声は広く知られていった。2009年から福島で「クリシャル国際音楽祭」が始まるなど、日本中で彼女の歌は愛された。そんな自分を育ててくれた日本が2011年3月の東北大震災で大きな被害を受け、アイリカはその日から被災地の人々を助けるために日夜奔放し、現在もなお、日本を支えるために活動を続けている。

「人は誰もが早い遅いに関わらず、自分の“冬の旅”を経験すると思います。そして、その暗い影から自分を光に向かって解放する道を見つけれられるのかもしれませんが...。そうなることを祈ります！」と、彼女は言う。

数々の人生の“冬の旅”を乗り越えて、“...Willst zu meinen Liedern deine Leier drehn?”今も、そしてこれからも新たな“冬の旅”に向かって歩み続け、春を捜し求める彼女が歌うシューベルトの「冬の旅」...

是非楽しみに足を運んでください。

(佐藤壮馬)

F.Schubert “Winterreise” Liederzyklus nach Wilhelm Muller

ソプラノ: アイリカ・クリシャル ピアノ伴奏: ベルンハルト・ヴンシュ

日時: 2013年1月19日 14時開場、14時30分開演

場所: イーゲルホール (鎌倉市二階堂773-100)

チケット: 全席自由 3,500円 (当日お支払いください。)

お問い合わせ: <http://www.fuyunotabi-no-tomonokai.de.rs/>



Eilika Krishar アイリカ・クリシャル ソプラノ・リリコ

「...誰がこの繊細な女性からホール全体に響く声が出ると思惟しただろうか!?彼女の声は大きなアリーナにおいても全聴衆に生の声を届かせることができるオペラの声である。モーツァルトのコンサートアリアでは彼女の声の音域の広さとダイナミズムの大きさに驚かされ、そのフォルテッシモはまるでなにかを切ってしまうほどのメタリック性を持っていた。しかしシューベルトの歌曲においては、ピロードのようにやわらかく細やかな表現で歌ったのである。この晩彼女はメゾ・ソプラノのようなやわらかく暗い響きでリート歌い、同時にドラマティックなソプラノアリアをもこなしたのである。」(2011年5月1日 シュヴェービッシュ・ポスト紙)

1983年北ドイツ・東フリースラント地方で教会の牧師であり政治家でもあった父親の長女としてアイリカ・クリシャルは生まれる。彼女の祖父である世界的に著名な、ヨーロッパ中世都市研究者のハインツ・シュトープ博士がもともと音楽家を志していたという影響で、5歳の時ピアノを始める。16歳でアメリカ・サン・ディエゴで声楽を始め、2002年ドイツ・デトモルト国立音楽大学声楽科に在籍するが、志半ばにて断念。その後ミュンヘンの哲学専門大学にて勉学。哲学と元来持ち合わせる詩と文筆の才能の頭角を現しつつあった2005年、ミュンヘンでの小林春仁教授との運命的な出会いにより本格的に歌の世界に再帰する。日本で広島を皮切りに全国各地で150回以上ものコンサートを行い、彼女の歌声は広く知られていく。2009年から福島で「クリシャル国際音楽祭」が始まった。2011年3月東日本大震災の日から彼女は福島の人々を助けるため日夜奔放し、彼女の友人でもある元ドイツ統一大統領クリスチャン・ヴルフ氏にも協力を求めつつ、被災地の親子たちをベルリンに受け入れる一方、ドイツ中で被災地のためにチャリティ・コンサートを行い、同年5月に被災地を訪問し避難所を回りコンサートをする。ドイツに戻ってから災害の影響や疲れなどから5週間の病院生活を余儀なくされる。そのようなアイリカの真の愛情を持って何事にも深く情熱を傾ける心が彼女の歌にも表れている。2010年スイスのプレミアム国際オペラ・コンクールにて最優秀賞を獲得し、ヨーロッパの彼女を知る音楽家たちは、「アイリカ・クリシャルの声は特別な声!」、「今まで類のない素晴らしい声!」、「パーフェクトな声のコントロール」、「将来歴史的な名を残す偉大な歌手になるに違いない!」などと絶賛している。日本では近い将来「日本が生んだドイツの歌の女王アイリカ・クリシャル」と人々に喜ばれる日がやってくることを熱く期待されている。2011年12月フランクフルトで、現在ドイツを中心に名声を上げている指揮者・ピアニストであるベルナルド・ヴンシュと録音したシューベルト、ヴォルフ、ツェムリンスキーの歌曲がオーストリア放送局で翌2012年1月に特別放送された。

一度歌をあきらめたアイリカが、ベルカント唱法の秘密を明らかにして本物のオペラ歌手の育成と、「声の治療は真の発声法からしかできない」と証明している“Kobayashiメソッド”により、人間として不可能と思われるまでの完成度の高い声を手に入れることに成功し、今まで世界で女性が歌った録音が4本しかなかったシューベルトの「冬の旅」を2011年9月ミュンヘンでリリースし、プロとして本格的なデビューを果たした。その歌声と解釈の素晴らしさで、「今までの女性が歌った最高の『冬の旅』だ!」と歴史的な歌手シュヴァルツコップとフィッシャー・ディスカウのマスター・クラス伴奏を務めたステファン・ラオックス氏が自信を持って言うアイリカ・クリシャルの「冬の旅」であった。彼女の「冬の旅」ではとくに失恋の苦しみと痛みと失望が奥深く表現されていて、さらにその中でも同時に救いや幸福をも聴く人に感じさせてくれるのである。そしてその後すぐに2012年ベルリン・フィルハーモニー・ホールや、ミュンヘンの王宮劇場、クヴィレス・テアターのような有名な劇場やホールから出演依頼が相次ぎ、シュヴァルツコップやフィッシャー・ディスカウ、ヘルムス・ブライ、ペーター・シュラーヤーなどの往年の大歌手の「冬の旅」やドイツ・リートを伴奏した歴史的なピアニスト・イェルク・デームス氏は「アイリカの『冬の旅』は素晴らしい!できれば私もその伴奏をしたい!」と、手紙をしたためた。そしてベルナルド・ヴンシュも彼女の声と音楽性を絶賛し、「2012年2月に日本では是非彼女の伴奏をしたい」と表明し実現した。彼女は「冬の旅」を今までベルリン・ミュンヘン・ミュンスター・東京・長野・そして彼女の日本でのデビュー地である広島で歌っており、いずれも聴衆に圧倒的な深い感銘を与えている。

一度歌をあきらめたアイリカが、ベルカント唱法の秘密を明らかにして本物のオペラ歌手の育成と、「声の治療は真の発声法からしかできない」と証明している“Kobayashiメソッド”により、人間として不可能と思われるまでの完成度の高い声を手に入れることに成功し、今まで世界で女性が歌った録音が4本しかなかったシューベルトの「冬の旅」を2011年9月ミュンヘンでリリースし、プロとして本格的なデビューを果たした。その歌声と解釈の素晴らしさで、「今までの女性が歌った最高の『冬の旅』だ!」と歴史的な歌手シュヴァルツコップとフィッシャー・ディスカウのマスター・クラス伴奏を務めたステファン・ラオックス氏が自信を持って言うアイリカ・クリシャルの「冬の旅」であった。彼女の「冬の旅」ではとくに失恋の苦しみと痛みと失望が奥深く表現されていて、さらにその中でも同時に救いや幸福をも聴く人に感じさせてくれるのである。そしてその後すぐに2012年ベルリン・フィルハーモニー・ホールや、ミュンヘンの王宮劇場、クヴィレス・テアターのような有名な劇場やホールから出演依頼が相次ぎ、シュヴァルツコップやフィッシャー・ディスカウ、ヘルムス・ブライ、ペーター・シュラーヤーなどの往年の大歌手の「冬の旅」やドイツ・リートを伴奏した歴史的なピアニスト・イェルク・デームス氏は「アイリカの『冬の旅』は素晴らしい!できれば私もその伴奏をしたい!」と、手紙をしたためた。そしてベルナルド・ヴンシュも彼女の声と音楽性を絶賛し、「2012年2月に日本では是非彼女の伴奏をしたい」と表明し実現した。彼女は「冬の旅」を今までベルリン・ミュンヘン・ミュンスター・東京・長野・そして彼女の日本でのデビュー地である広島で歌っており、いずれも聴衆に圧倒的な深い感銘を与えている。

「...この『冬の旅』でアイリカ・クリシャルは聴衆に、『冬の旅』を元々シューベルトが書いた高い声域で歌うことの適正さを証明し、感動を与えた。『冬の旅』の世界に完全に溶け込み、時には静かにささやくように、そしてやさしく歌ったかと思うと、次の瞬間には力強く、聴衆を凍りつかせるかのように、苦しみと、痛みと、涙の『冬の旅』を歌ったのだ。」(2011年1月 ミュンスター紙)

Bernhard Wunsch ベルナルド・ヴンシュ 指揮者・ピアニスト



1965年ドイツ、アウグスブルク生まれ。ヴュルツブルグとミュンヘンの国立音楽大学在学中すでに南ドイツ地方のオーケストラを指揮する。またザルツブルク音楽祭やバイロイト音楽祭にホルスト・シュタインのアシスタントとして関与し、またコーリン・デービスやロルフ・ロイターのマスタークラスにも参加し研鑽を重ねる。その後ビーレフェルト、ヴィースバーデン、ドゥイスブルク、ケルンそしてシュトゥットガルトのオペラ劇場などで指揮し、ラジオとテレビの出演や、CD録音もこなし、全ドイツ中のオーケストラ指揮をする。1995年以来彼は指揮者としてヨーロッパはもとよりロシアやヴェルター湖音楽祭、ノイシュヴァンシュタイン音楽祭でも名声を上げ、フランス、イタリア、スペイン、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、プエルトリコ、メキシコ、イスラエルでも客演指揮をする。

彼はロマン派から現代音楽を好み、18~20世紀のシンフォニー音楽のスペシャリストであるが、オペラ(ドン・ジョヴァンニ、トスカ、蝶々夫人、椿姫、カルメン、ローエングリンなどを初め約60にも及ぶオペラレパートリーがあるということは彼の若さでは驚異的な事と言えよう!!)、オペレッタ、オラトリオ、ミサ曲、さらにバレエ、ミュージカル、上質な娯楽音楽や映画音楽も幅広く指揮している。またポピュラー音楽やミュージカル音楽のアレンジもこなし名を上げている。2008年より映画プロデュース、イベント・ガラ・コンサートやコンサート・ツアーなどの企画をも北ドイツ放送局と共同で手がけている。近年はドイツ、ミュンヘン・フィルハーモニーのガスタイク、ハンブルクのレツィスホール、フランクフルト旧オペラ座、ベルリン・コンサートホール、そしてオランダなどでのコンサートの活躍も著しい。またピアニストとしても室内楽やリート伴奏に特に好んで力を入れている。現在ミンスク放送管弦楽団主席客員指揮者である。

